

# 六花

り  
つ  
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada  
*cover designed by masami*

5月号

貫

山田六甲

五月三日六花創刊十五周年

今年竹十五枚目の皮脱いで

雨粒の撥ねて入りたる落椿

淡月の黄砂の山を照らしけり

芹抜きし濁り流れてゆきにけり

花筏引き寄せにけり鯉の渦

花影へ枝垂桜の散り初むる

青鷺の頭重げに花の昼

春の川斜ななめに渡る渡し船

春水しゅんすいに差したる棹さおの震へをり

春水に米をすばやく磨とぎにけり

霧走る谷に満ちたる桜かな

一湾いちわんの夜景をよぎる春の雁かり

目を絞しぼり花満月を仰ぎけり

朧おぼろかな道を横切る山の水

花散らす雨より現ある霧風きりしまき巻

流さるる浮き名逆手に花便り  
舟遊び櫂さすたびに泡生まる  
ボート漕ぐ櫂に光をしたたらせ  
ボート漕ぎ出すひと押しを貰ひ受け  
乳房へと汗零れ来る流れ落つ  
石を裂く樹の根老鶯咈せり  
万緑やかたつて朱塗りの仁王門  
肉厚の雨音立てり緋の牡丹  
草に寝て夏鶯の声しきり  
流るるも落つるも滝の姿なり

自画像

貝森 光洋

春寒はるさむの自画像哀しきまでに鼻大き  
 洗い立てのジーンズごわごわさえかえ冴返る  
 今はもう数え切れないほど土筆  
 おたまじゃくし夫婦の顔の似てきたり  
 底なしの闇となりけり猫の恋

氷っ柱ら

梶浦玲良子

箒目の出口を探す春隣  
 仏の座もう逃げられぬ村の数  
 つむじ毛を氷柱の狙ふ月夜かな  
 大根の山と積まれしとさか鶏冠かかな  
 藍あいがめ糞はもう寝た頃か鴛お鴦しの水み脈お

春しゅん  
耕こう

木内美保子

春耕や背にやはらかき陽を乗せて  
水仙を抱いて来し胸香りけり  
豊かなる春水飛ばし峡水車  
重なりて蕊を並べて落椿  
引く波が裏返し行く桜貝

牧の春

笹村政子

三宝さんぼうの豆零れ落つ節せつ分ぶん会え  
敷しき藁わらを燃やせし匂におひ牧の春  
動うごかざる蝮へび囲みぬる蝮へびの道  
嘯さえずりや渡り廊下の昼の燭しよく  
生臭き春風吹けり鯉の池

## 小部屋

水谷ひさ江

木の根本囲みて雪解してゐたる  
 稜線の端は岩なり寒の潮  
 梅活けし小部屋の襖開きおく  
 枝垂梅車椅子より手を伸ばす  
 梅ヶ香や茶の菓子皿に塩羊羹

六花創刊十五周年銀雪賞

松下幸恵百句

お多福の銘菓いたたく節分会  
愛の日やパン焼き上る匂ひして  
谷あいの障子の白き合掌家  
保養所の前のやぐらに小鳥来る  
どんぐりに手足を付けて遊びけり  
生垣の向うひろがる春の海  
云ひわけはよさう白梅凜と咲く  
薫風に足なげ出して爪を切る  
何もかも語れる人とぼたんなべ  
雪ざらし和紙作りする北の人  
あご上げて走る一等運動会  
山間に白垂の学舎曼珠沙華  
美しき毛並の犬にゐのこづち  
十三夜無沙汰を詫びるふみを書く

群むれ萩はぎや雄おつ岡こう雌めつ岡こうの山の坂  
秋しゅう冷れいや山裾やますそを行く赤きバス  
秋雨あきりゅうや小走りにゆく絵画展  
芋名いもめい月書げつづきなれし筆なくしけり  
父に謝し母に多謝して菊花展  
垣根菊かきねきく白きボールのおき忘れ  
宿しゆく直ちよくの挨拶あいさつ笑顔えんご沈しん丁ちよう花げ  
返り花かえりはな忍者屋敷へ送迎バス  
山の声海の声聞く漁りょう初はじめ  
春浅はるあさき食パン買ひに出たけれど  
砂利じり道みちに足をうばはれ薄紅うすもみじ葉  
砂利一つ指でとばして秋の海  
水仙すいせんをブルーの紐で束ねけり  
たづねゆく友へみやげの花菜はなな漬づけけ  
愛の日やなすがままにと白き鳥

早春の六甲街道有馬まで  
無造作につみ上げてあり冬野菜  
立春の豆を見つけてる部屋の隅  
梅雨つゆ晴間はれま舞子淡路を一望に  
干し大根だいこん二代目犬舎の横につむ  
初漁はつりょうや家紋の旗に差す朝日  
いさかひの後に大きな冬の虹  
歩巾ほばあふ二人に寒の帰り道  
絵手紙に花のデッサンしてをりぬ  
どこ迄もつゞく花道深呼吸  
草刈のシャツの背中を虫が這ふ  
目かりどき又呼鈴よびりんに目のさめる  
親と子の歩巾合はざり春の橋  
枯かれ芝しばに長くのびして猫ねむる  
五目すし皿に盛り分けひなまつり

恋猫や八百屋お七の夜はかくも  
五分咲きや寒の戻りの人の声  
座る場所どこでもいいよ花の昼  
あつさりと出て行く猫や四月馬鹿  
菜の花や稜線をゆく雲の筋  
山寺の豆まき賑はふ人の波  
小春日や席に残れる推理本  
窓越しに雪を眺めてする電話  
山荘の小山あかるく寒椿  
ストーヴを猫に取られてしまひけり  
小雪舞ふ大声あげる卓球に  
大寒や二双櫓のものがたり  
卓上に銘水のあり風邪薬  
小雪舞ふ暖簾かけかへ宿の風呂

にはか雪足湯にあそぶ若き人  
豆の実のぎつしりつまり梅雨の入り  
茸飯さげていそぐよ鯖街道  
蟻の穴じつと見てゐる薄暑かな  
丁寧はくに白磁じにそそぐ新茶かな  
朝霧や試歩ほのつま先濡れきたる  
定年の力ひらけり大賀蓮  
新涼りやうや岩温泉で猿およぐ  
からみ合ひもつれ合ひ秋深まりぬ  
からす瓜兄弟結ぶつる強し  
夏草の下を流るる山の水  
向き合うてオリーブの花髪にさす  
毒のある山菜もあり春の山  
紫木蓮しもくれん校舎の時計三時さす

今昔の梅見のはなし父に聞く  
春の雪沁みこむ鍋をかこみゐて  
意味のあることと解して春立つ日  
釘煮炊く火もと確め取る受話器  
菜の花の和物の出る法事かな  
恵方巻盆にならべて客を待  
雪時雨足湯に老若男女かな  
細雪待合室の忘れもの  
きうりもみ朝市で買ひ求めきて  
朝市の艶よき茄子を糠漬けす  
山桜散り敷く道に風の紋  
遠山の市章くつきり栗明月  
入試合格新芽ふき出す通学路  
愛の日や花壇にうすく戻り霜

紫木蓮売家の庭に咲きほこる  
花吹雪カラオケ大会舞台へと  
海峡を一跨する走り梅雨  
もう一輪薔薇の花足し花束に  
門飾る三色すみれ集会所  
初笑ひ卓球台の女たち  
淑気かな指折作句の部屋あかり  
くれのこる川の向うの盆提灯  
秋空やゴンドラゆつくり上り降り  
光りつゝ草間に消ゆる大ほたる  
指を折るベンチに二人残り藤  
春雷やおびえし犬を思ひ出す  
霧晴れて六甲山の夢風船  
葉牡丹で干支の字を書く花時計

# 雪樹集

今いちど

池崎るり子

香り良く臘梅ろうばいの枝の八方に  
改装の駅広くなり梅匂ふ  
菜の花や集団登校みぎひだり  
今いちど五段飾りの雛見たし  
立春の昏れて足元ゆらぎけり

七日粥なぬかがゆ

松本文一郎

節分

岩松八重

御降りのやみし朝あしたの舗道ほどうかな  
江の電に恵方えほう詣もうでの人となる  
やさし気な閻魔えんま様さまなり初詣  
八十翁七草粥の三膳目  
七日粥先々代の漆うるし椀わん

コンビニの節分コーナー笑顔鬼  
雪道の鬼逃げまどふ足の跡  
路地窓の豆撒まめまき人の影絵力  
節分の豆吸ひ込みし夜の底  
帰り道豆まく声にせかさるる

# 六花集

山田六甲選

筒井八重子

春寒の乾きし土に芽吹きあり

浅春の木霊行き交ふ峰を行く

目の前に煙野焼の生まれり

寒の水枯れ苔の上流れけり

一輪の水仙の香に眉上ぐる

山本ミツ子

菱餅の反るを押さへつ焼きぬたる

娘を持たぬ家に雛を万愚節

黄砂降る機中眼下の砂漠かな

法話聞く睡魔のせまる彼岸寺

柄杓まで僧手作りの花御堂

平居 滯子

胸元に形見のペンを風光る

春灯下子の耳たぶの亡夫に似て

コンパスのはづれし指針春嵐

春月やシーツの糊は薄目好き

不意打ちの亡夫の書き込み春の雷